

日本ロマンス語学会第 59 回大会（2021 年、ウェブ開催）

第 1 日・2021 年 5 月 15 日（土）

統一テーマ：ロマンス諸語における社会言語学

（13:10～15:40 / セッション 2/2、発表 4～7、14:20～15:40）

発表 5

ヨーロッパ文学の中でのロマンス諸語言語多様性の語られ方

宮崎大学多言語多文化教育研究センター
寺尾 智史（てらお・さとし）
@enguelgue

予定時間 14:40～15:00、発表時間 15 分程度、質疑応答 5 分程度

発表の概要

物語の対象を縦横無尽に広げてきた欧州の文学において、ロマンス諸語に属する言語多様性についてもその俎上に載せられることは少なくない。それでは、ロマンス諸語について扱ったこれらの文学作品の中で、その言語多様性はどのように描かれているか、社会言語学的な分析を試みる。

具体的には、作家 Luz Gabás のスペイン語小説 *Palmeras en la nieve*（2012 年）における赤道ギニアのスペイン語、およびアラゴン語の表象、作家 Francisco Niebro（ポルトガル語名 Amadeu Ferreira）のミランダ語小説 *La bouba de la tenerie*（2011 年）におけるミランダ語の表象について、誰が、どんな場面で分析対象の言語体系によって語っているかをデータ化したうえで、小説を成立させる上で、それぞれの言語体系がどのような役割を担わされているか、また、どのような効果を生んでいるかを分析する。

そのうえで、これらの比較的近年作家のロマンス諸語の言語多様性への向き合い方を考察し、ダンテ『神曲』、セルバンテス『ドン・キホーテ』より連なるロマンス諸語の言語多様性表象の変遷から、文学史における作家たちの言語多様性認識の位相について論じる。

文学史におけるロマンス諸語の言語多様性表象の変遷

〔類型 I〕 規範言語を引き立てる「踏み台」、時には「道化」／「田吾作」としてことさら卑下しコントラストを際立たせる手法：ジル・ヴィセンテの戯作や『ドン・キホーテ』に現れる「サヤゲース」（ドウロ川右岸、現在のスペイン側で話されていたことばをデフォルメしたもの）という言語体系（16世紀～17世紀初、なお、〔文学作品によって野卑つぶりを強調された代物とはやや異なるが〕サヤゲースはドウロ川左岸・ポルトガル側のミランダ語として残存）および同様のケース

〔類型 II〕 規範言語に溶け込むことによって「規範言語の体裁を整え、豊かなものにして／する」ことによって「溶け込む／同化する／滅びる／消失することは不可避なもの、規範言語の“細胞”として欠かざる、しかし不顕性の存在となる」というコンセプト（特に 20 世紀前半の文芸評論家としてのウナムノ、バフチン）→国家言語の「プルリセントリック（複中心）言語」思考の淵源

〔類型 III〕 同じ国家に「同居」する規範言語／標準語を飾り立てる周縁の言語多様性としての慎ましやかな存在であることを主張（20 世紀後半のミランダ語詩人モウリーニョ、および同様のケース→いわゆる「方言文学」の氾濫

〔類型 IV〕 規範言語／標準語と並立可能な存在、もしくは、規範言語との関係を超えて、その独自性を示唆：ダンテ『神曲』（14 世紀初）、ミストラル『ミレイオ』（1859 年）を嚆矢とし、上記ミランダ語小説 *La bouba de la tenerie*（2011 年）など多数。

この類型には、近世～近代にかけて、ことばを土地に結びつける、テリトリアリティ（領域性原理）と強く結合したものが多かった一方、近年は、特に小説の分野で、言語多様性のユニバーサルな／コスモポリタンな価値を標榜したものも増えている。→分析の意義

主要参考文献

沓掛良彦『オルフェウス変幻——ヨーロッパ文学にみる変容と変遷』（京都大学学術出版会、2021 年）

寺尾智史『言語多様性の継承は可能か——新版・欧州周縁の言語マイノリティと東アジア』（彩流社、2017 年）

——『ミランダ語が生まれたとき——ポルトガル・スペイン辺境における言語復興史』（三重大学出版会、2021 年）

ハブチン『小説の言葉』（新時代社、1979 年）